

期待されるオリーブ栽培の地域への貢献 ②

～佐世保市宇久町～

はじめに

前回2017年11月号では、わが国におけるオリーブ栽培の歴史や九州・長崎県における栽培状況、栽培に必要な条件、見込まれる効果などについて紹介したが、今回から各地の具体的な取組み状況等について調査、報告していく。

本稿では、佐世保市宇久町（宇久島・寺島）を例に、長崎県の離島地区におけるオリーブ栽培の取組みとそれを支えている人々や抱える課題などについて報告する。

I. 宇久町について

佐世保市宇久町は、五島列島の最北端に位置する宇久島（面積：24.92km²）と寺島（面積：1.27km²）という2つの有人島とその属島からなる。以前は単独自治体だったが、平成の大合併で2006年3月に佐世保市に編入合併したことで、佐世保港の西方約60kmの海上に位置する全国でも珍しい外海離島合併地域となった。



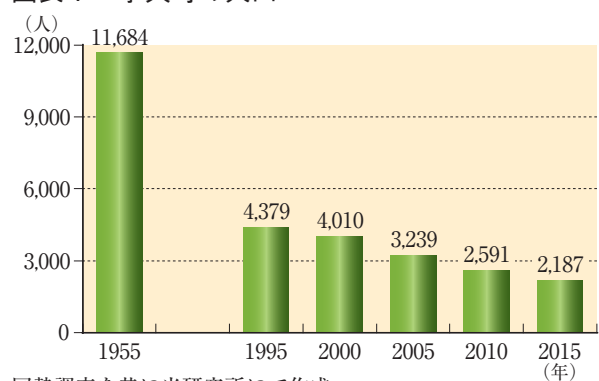
宇久島位置図（宇久町観光協会HP）

1. 島の人口など

島の人口は、1955年の1万1千人台をピークに減り続けており、2015年には2千人近くにまで激減、近い将来は人口1千人台も見えてきている（図表1）。

外海離島のため交通手段に乏しいという地理的要因から、第一次産業以外の産業が育ちにくい環境にあることが、人口減少の一因とも考えられている。島の第一次産業は、農業が肉用牛

図表1 宇久町の人口



国勢調査を基に当研究所にて作成

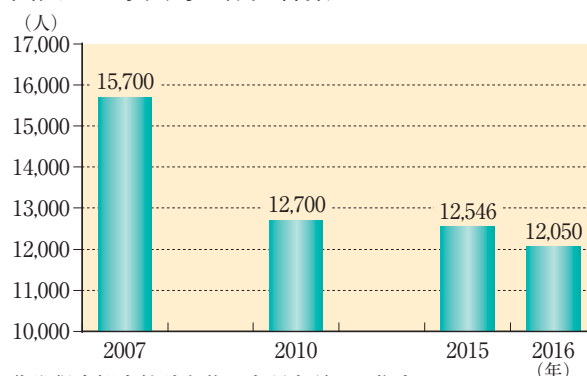
や水稲中心、漁業が一本釣と延縄漁であり、島の就業者数全体の3割近くを占めているが、若者の都市部への流出が続き、島の高齢化率は49.7%（2015年国勢調査）と島民の2人に1人が高齢者という島である。

2. 来島者数

宇久島では、交流人口拡大策として旧宇久町時代にスポーツ合宿の誘致に注力しており、美しい海に囲まれた離島の豊かな自然を活用して2000年に野球場、またその関連宿泊施設として「宇久シーパークホテル」をオープン。翌2001年には第3種公認レベルの陸上競技場を整備して、宇久総合公園を完成させている。続いて2004年には、クルージングスポットとして最大38隻のヨット類が収容可能な「フィッシャリーナ宇久」が完成した。ここは翌2005年に九州海の駅設置推進会議より「ごとう・うくじま海の駅」として海の駅にも認定されている。

このような各種振興策もあり、佐世保市に合併直後の2007年には1万5千人以上の来島者数を数え、翌2008年に島の歴史文化を活かす中心施設として「海士（鮑漁を行う男性の海士）と捕鯨文化の里 浜方ふれあい館」が地元住民の手によって誕生した。もともと、それ以降は島内に新たな集客施設の設置などはなく、近年の来島者数は1万2千人台で推移している（図表2）。

図表2 宇久町の観光客数



佐世保市観光統計を基に当研究所にて作成



島民の手造り施設「浜方ふれあい館」

II. 宇久島におけるオリーブ栽培

宇久島でのオリーブの栽培は、地元の民間企業「株式会社 零（ゼロ）」のオリーブ事業部をはじめ、宇久島オリーブ振興協議会が担っている。

1. 島おこしのはじまり

（株）零（代表取締役：中村一美氏）は、もともと同社会長の笹山憲志氏の個人経営会社「アーバンオート」（車の修理・販売会社）が原点である。笹山会長は、合併後減り続ける町の人口と

増えない観光客を目のあたりにして将来に危機感を覚え、自らが島おこしに乗り出すべく「合同会社 零」を立ち上げ、本業は別会社を設立して移管した。(同) 零による島おこしを行うためには、まず会社の信用力と体力の向上を図る必要があることから、その両方を満たす仕事として、佐世保市から宇久島における委託業務を請け負うことを考え、2014年に合同会社を株式会社に組織変更し、島内の給食センター調理業務や陸上競技場・火葬場の運営と維持管理の仕事などの受託を始めた。こうして、(株) 零への信用と経営の安定を得ることで、腰を据えて島おこしに取り組む環境を整えた。

2. オリーブ栽培への取組み

(1) 島おこしの新たな素材としてのオリーブ

これまでにない手法で宇久の島おこしに取り組みたいと常々考えていた(株) 零の笹山会長と中村社長であったが、有効だと思える施策を考えめぐっていたところ、同社顧問の岩田純一氏から「自分は(株) オリーブジャパンの代表取締役である中山良一氏と知り合いだ。オリーブを島おこしに活用してみてもどうか」との提案があった。

そうして昨年(2016年) 3月に、岩田氏や中山氏とともに、(一社) 九州オリーブ普及協会理事長の百富孝行氏も来島して島内を視察し、栽培に関するアドバイスやオリーブを町おこしの手段として用いている地域も少なくないことを聞くに及び、宇久島におけるオリーブ栽培に挑戦しようと決意した。

(2) オリーブ栽培を開始

笹山会長は、宇久島におけるオリーブ事業について「オリーブ事業は10年間とスパンが長い。出来るだけ早く木を植えて、基礎固めは自分たちの代で終わってしまい、次世代に引き継いでいきたい」との思いから、(株) 零にオリーブ事業部を発足させてスピード感を持って同事業に取り組んでいこうと考えたが、島全体にこの事業を浸透させるためには、島内を巻き込んだ専門組織を立ち上げて、そこを中心に行っていくことがベストであると考え直した。

そして、オリーブ普及協会の百富理事長らの来島から約1カ月後の2016年4月21日、島内有志6人で宇久島オリーブ振興協議会(会長:宮崎吉男氏)を立ちあげるとともに、植樹第一弾となるオリーブの苗木80本を、笹山会長と宮崎会長がそれぞれ40本ずつ植栽するに至った。



(株) 零のオリーブ事業部

(3) 進む宇久島のオリーブ事業

①オリーブ園の造成

2016年8月、宇久島オリーブ振興協議会は佐世保市における長崎県の産地化ブランド事業の一環として、市の指導により結成された「佐世保市オリーブ振興協議会」に加盟し、同協議会の事務局を務めている佐世保市内の建設業(株)堀内組(市内各地でオリーブ栽培にも取り組んでいる)を通じて、国内オリーブ栽培の本場・小豆島のオリーブ事業者ともつながりを持つことができた。

その後、11月にオリーブの植樹祭を大々的に開催した。場所は、「宇久オリーブアイランド海風の丘」と名付けた島の中心地である宇久町^{たいら}平地区を眼下に見下ろすことができる1.2haの畑で、当日は県議会議員や市議会議員、観光協会会長を招待し、地元民放TV局とWEBサイト「長崎美人時計」がタイアップした番組取材チームも招聘している。この植樹祭には、島民200名以上が参加して、430本のオリーブの苗木を植樹した。

同地は、長年耕作放棄地となっていたところを、宇久オリーブ振興協議会のメンバーが新たに造成した圃場^{ほじょう}である。(株)零の笹山会長は「ここはもともと段々畑だったことから、平地とは異なり思ったほどは植樹する面積を確保できなかった。本来ならばもう少し多くオリーブの木を植えたかった」と語るが、この「海風の丘」は、船が港に入ってきたときに、まず観光客の目に宇久島を“オリーブの島”としてアピールできる場所となる。



宇久オリーブアイランド 海風の丘



「海風の丘」から見下ろす宇久の海



対岸から見る「海風の丘」。港のすぐ近くにあることがわかる

また、笹山会長は「当地は近い将来、観光オリーブ園として宇久を訪れた観光客に園内散策や実の収穫を行うなど、体験型オリーブ園としたい。近隣には宇久シーパークホテル（現在は閉鎖中）もあることから、宿泊型体験観光が可能となる。また、ホテル周辺の土地には既に佐世保市からオリーブの植栽許可を得ており、一帯をオリーブの木で埋め尽くすことを想定している」と、今後のプランを描いている。

②資金面について

オリーブ事業を遂行するにあたり最も気になることが、前月号レポートでも指摘した多額の初期投資が必要となる点である。現在、宇久島のオリーブ事業における圃場の整備や維持・管理費、人件費や、苗木・肥料・農薬等の購入費用など、経費は全て（株）零が資金を投入しているが、これではいずれ限界がくる。そこで、今年（2017年）の11月には宇久島オリーブ振興協議会を法人化（一般社団法人）し、同協議会会長の宮崎氏が代表に就任、来年度から国境離島新法に関連する予算などを受け入れたいとしている。

さらに、福岡で再生可能エネルギーや産廃処理場・地下ダムを計画するコンサルタント会社（株）水資源・環境研究所の技術顧問を協議会の顧問に招聘し、また現在、宇久島と寺島において風力発電を計画中であり、島おこしへの協力を表明している日本風力開発（株）（東京、塚脇正幸社長）とのつながりを強化した。

③オリーブ事業への協力

日本風力開発（株）は、既に青森県六ヶ所村や千葉県銚子市など多くの風力発電事業を展開した実績のある企業で、ここ宇久町には33基の風力発電用風車を設置して約10万kWを発電する計画を立案しており、着工は2020年を予定している。

同社は、宇久町において風力発電事業を展開するにあたり、塚脇社長自ら来島して、島おこし事業への協力としてオリーブ栽培への支援を表明、2017年1月には宇久島オリーブ振興協議会とオリーブ事業への支援について合意し、協定書を交すに至っている。

また、風力発電事業については、売電までの設備関連工事に加え、売電開始後も常時メンテナンス関連の仕事が発生することから、これらの仕事を（株）零などで受注することにより、長期スパンのオリーブ事業において収益が出るまでの空白期間を埋めることが可能となる。

Ⅲ. 宇久島におけるオリーブ栽培

自動車の修理・販売が本業であり、就農経験のない笹山氏をはじめとするオリーブ振興協議会のメンバーがオリーブ栽培に挑戦するなか、離島特有の気候との闘いなど、さまざまな苦労を重ねながら1年半が経過した。

1. 植え方など

- (1) 他地域同様、土壌・土の管理が最も重要であるとの認識をもつ。また、木はこまめに剪定することで横に低く枝を伸ばしていくとしている。こうすることで、風通しが良くなり、日光を万遍なく浴びることができる。これにより実が生りやすい木となり、各種作業も軽労働で済む。オリーブの木の大きさを一定に保つ予定。
- (2) 1つの圃場で葉が全部落ちた木が出たことがあり、それらの木を全て掘り返してみると、根に虫の幼虫が付いていたとのことである。このように、オリーブの木に異変が起きた場合には、佐世保市オリーブ振興協議会経由で提携している佐賀大学の農学部で原因を調べてもらうことができる体制を整えている。
- (3) 島ではオリーブを受粉させるための植え方にも工夫が必要となる。離島独特の風向きを考慮しながら、花粉樹をどの位置に植えていくのかなどを考える。そうしないと、植えたのはいいがほとんどの木が受粉しなかった、などの事態が容易に想定される。

2. 風対策

前記「宇久オリーブアイランド 海風の丘」は、島内でも屈指の風が当たる場所である。このような場所でもオリーブが育つように、1本の木に三方向からの支えを入れるなどの風対策がとられている。当地に植樹してまる1年となり、これまでに台風が4回接近したとのことであるが、倒れたオリーブの木は見受けられなかった。一方、他の場所では葉がほとんど落ちてしまうケースも見受けられたが、枯れるまでには至らず、新たな枝葉が芽吹いてきている。



支えを入れて植えられる

3. 塩害対策

オリーブは、他の作物より塩害に強いと言われているが、宇久島では外海離島という立地から台風などで島全体が多量の海水を被る機会も多い。そのような場合、振興協議会のメンバーが木

の上部から水をかけてしっかり塩を落とすように心掛けている。

Ⅳ. これからの動きについて

1. 植栽本数

現在、宇久島には計500本のオリーブが植えられているが、宇久町全体の農地面積から換算すると、宇久本島に14万本、寺島に10万本の植樹が可能である。しかしながら、宇久島オリーブ振興協議会では、自らの管理能力や資金力、人材能力に加え、日当たりと水はけがよく、なるべく風当たりの弱い土地を選んで植えていくとなると、2017年度に1,000本植えた後は2018年度以降、毎年1,000本ずつ増やしていく（植栽面積で換算するとオリーブの圃場が毎年約26,000㎡ずつ広がる計算になる）ことが現実的と見ており、10年後に1万本超の植栽を目指している。また、オリーブ事業そのものの黒字化は12年後を見込んでいる。

2. 新たな雇用の創出と対策

1,000本のオリーブの管理には、最低5名の人員が必要となる。宇久島オリーブ振興協議会では、その人件費対策に“離島における新たな雇用の創出”として、国境離島新法の活用が検討されている。

他方、(株)零のオリーブ事業部には3～5名が在籍しており、うち2名はオリーブ事業専属として毎朝の圃場チェックを行っている。同部では、これからオリーブ振興協議会とともに11～3月はオリーブの植栽を、4月以降は圃場の維持・管理を担っていく。また、10年後オリーブの植栽が1万本を超えると、単純計算で新たに50人の雇用が発生することになる（必要になる）が、管理するオリーブ圃場をうまく組み合わせることで、もう少し少ない人数でも業務が遂行できるよう工夫していきたいとしている。

3. 宇久島におけるオリーブの売り出し

(1) 宇久島産オリーブの開発

宇久島オリーブ振興協議会は、島でオリーブを売り出すにあたり、まずは3年後を目処に島内にオリーブの加工場を建設し、搾油機を設置したいと考えている。また、その商品化にあたっては、佐世保市オリーブ振興協議会が研究しているものの活用や、佐賀大学の意見も伺いながら独自色を出していきたいとしている。

(2) 「オリーブの島」のイメージづくり

オリーブを植えたばかりの宇久島では、これから数年間は実の収穫が見込めないため、当分の間は島オリジナルのオリーブ商品ができない。そこで、(株)零の笹山会長は、熊本県天草市や鹿児島県日置市のように、宇久島がオリーブの島であるというイメージづくりのため、オリーブ商品を販売するショールームを先行して作りたいと考えている。

店の設置場所は、観光オリーブ園「宇久オリーブアイランド 海風の丘」の近くとし、ここでは外国産オリーブ商品を購入、販売することを想定している。また、宇久島産オリーブ商品ができるようになれば、その商品価値が失われないように、宇久島産のみを販売する意向である。

(3) 地元牛農家とのコラボレーション

宇久島は肉用牛の生産が盛んな地域である。オリーブが島の特産品になれば、島の牛にオリーブの実の残渣^{ざんさ}を食べさせることで「宇久島オリーブ牛」という新たなブランドが開発されることも期待できる。笹山会長は、既に牛農家の1頭に残渣(ざんさ)を食べさせる実験を依頼しており、オリーブ事業が宇久島の新たなブランドの誕生にもつながることで、牛農家も潤うことが期待される。

おわりに

(株)零の笹山会長と中村社長、(一社)宇久島オリーブ振興協議会の宮崎理事長は、宇久島でオリーブ栽培に取り組み始めた際、島民のなかから「こんな風の強いところでオリーブ？」などの声が上がリ、大変辛い思いをしたが、現在では理解者も増え、そのような声も聞かれなくなったとのことである。

3人とも当初は「オリーブはみかんより手がかからず、植えれば根付く」と言われて、少々楽観的に栽培し始めたものの、実際に手がけてみると、「みかんどころではない。みかんより手がかかる」、「やればやるほど難しくなってくる。奥が深い」、「土づくりや剪定は的確な時期に的確に行わないといけない。毎日が勉強」、「栽培が楽な作物というイメージで皆が飛びつくが、冗談ではない」などと口々に語っている。当研究所の前回記事にある『みかん栽培の1/3～1/5の労力で済むと言われているが、農作物を育てることに変わりはない』という、現実がやはりそこにはあった。また、「オリーブを育てるには、苗木よりもまず植える場所の選定が重要。植える方向やその向き、十分な土壌改良(鶏糞により酸性の土壌をアルカリ性にする、土を全てひっくり返してこねて入れ替える、排水パイプを中に通すなど)、要は愛情をもって育てるのかにかかっている」と、川棚町の清水オリーブ園を経営する清水美作氏と同様の言葉も聞かれた。

宇久島におけるオリーブ事業は、新たな産業の創造であると同時に、島の将来も見据えているため、振興協議会のメンバーは必死になってその栽培に取り組んでいる。その甲斐あって、昨年植えた苗木のなかから今年早くも実を付けた木も出てきており、メンバーに宇久島オリーブの今後に期待を抱かせている。このように、佐世保市宇久町におけるオリーブ事業は、それを担う島民の熱意がみなぎっており、今後がおおいに期待できる事業であるといえよう。

(杉本 士郎)